



藝える人①

宮木菜月

大学院美術研究科文化財保存学専攻
保存修復研究領域(彫刻)
博士後期課程3年



21 みやき・なつき / 1989年生。岐阜県出身。保存修復彫刻研究室では藪内佐斗司教授が指導し、仏像修復などの受託研究も行う。それと個人の研究との並行が糧になるという。



地下の一室の重い戸を開け、ふと足元に目をやると、人の形をした何かが……。誰か寝てる!？」と思いきや、彫刻だった。8世紀後半に作られたとされる唐招提寺蔵の重要文化財「伝薬師如来立像」を模刻しながら研究している学生がいるという。聞けばそれは、ひとかたまりの木から彫り出した一木彫の仏像で、木彫の源流にあたるものだとか。うーん、気になる。というわけで、後日、その学生、宮木菜月さんに話を聞いた。

めざめ…なぜ仏像？

「小さい頃から仏像好き」というわけではなかったが、小・中学生の頃、陶芸教室で立体

造形の楽しさをおぼえた。そして、藝大彫刻科への入学を志すなかで、思うことがあった。「彫刻科って、予備校でも、入試でも、大学に入ってからも、西洋の彫刻を習うんですよ。奈良や京都のお寺で見る仏像とは目指す

形の概念が違うな、と。ギリシャ彫刻は理想化された人体ですが、仏像は太ったり、顔や手がたくさんついていたり、よくわからない造形が多い(笑)。見ていくうちに、構造や技法に日本独自の発展が見られることもわかつ



一木彫にはカヤの木が使われることが多い。ヒノキに比べ粘りがあり緻密に彫り込める。乾くとヒビが入ることも。現状完成度は「6割。果てが見えない海のように」と宮木さん。

てきて、おもしろいなと」

まよい…いかに自分を殺すか

現在は12月の博士審査展に向け、例の「伝薬師如来立像」の模刻を進めている。一木彫の最初期の作例とされるこの仏像は、造形的にも構造的にもそれまでの日本に見られないため、鑑真とともに唐から来た仏工が制作に携わったともいわれる。一木を使う時代は短く、10世紀には寄せ木を使った効率化が進む。

「一木彫は、経済的にも労力的にも大変。まず、大きく、傷がない材木が必要だし、パーツごとに彫るより作業はしづらいし、やり直しが利かないので」

それでも取り組む動機は何なのだろうか。

「8世紀半ば〜9世紀の一木彫には、それ以前にも以降にも見られないような造形感覚があるんです。例えば、衣紋の端に布一枚くら



いの薄さの粘着質的な彫り込みがある。そういう技術やその背景を知りたくて」

藝大生というオリジナリティを追求しているイメージがあるが、方向が違うようだ。「文化財保存は主役が自分ではなく仏像。ど

うしても出てしまう自分の手癖や見方をいかに打ち消せるか、という意識でやっていますね。自分を殺した先にあるものを見ています」

ゆめ…作ることで解明したい

ところで、この「伝薬師如来立像」、足の

下にニョキッと出た芯棒までが彫られている。台座に差すためと推測できるが、それによって高さが出て彫りづらく、安定しなくなる。

「実際、作ってみて、重さを感じたりすることで、『昔の人はどうしていたんだろう』と考えるに至ります。そうしないと大きな疑問として浮かんでこない。仏像って文献上の美術史から研究されることがほとんどで、その美術史は完成したものを外から見て論じますが、作ることではしか見えてこないことってたくさんあるんじゃないかと思うんです」

将来は「何らかの形で仏像に携わってほしい」という宮木さん。それには制作や修復などの道があるが、以前研究室で手がけた平安時代の仏像修復に興味深い気づきがあった。「当時の仏像を解体してみると、すでに何度も修復されていて、各時代の制作者の手跡があるんです。丁寧なものもあれば雑なものもあったりして、それらが重ねられてきて、いま残っている。制作者の手柄まで感じられることもあって、おもしろいですね」

その視点が過去を発見し、未来に渡すことにつながるのかもしれない。